第６回仏教図書館協会研修会　10月12日（金）

講演１「禅宗史における基本資料」

花園大学副学長・
文学部仏教学科教授　沖　本　克　己

はじめに

私にあてられたテーマが「禅宗史における基本資料」ということでありますが、禅宗史における基本資料といいますと原典と工具書と参考書、この３つに尽きるわけで、基本資料の話はそれで終わってしまうわけです。おまけに皆さんはその道のご専門です。正に釈迦に説法。

一方そういう図書館を利用する我々はごくごく僅かのものしか使いません。正に猫に小判でして、猫とお釈迦さんの話で、猫が説教するというのも変なことでありますが、少しばかり本学の特色というあたりをお話ししたいと思います。

仏教系大学における図書館

実は私は図書館をあまり使わないもので、うちの大学のことをよく知らないのです。なぜ使わないのかと言えば、大体仏教学をやるものは本は自分で買うという癖をつけていまして、自分で買えないもの、或いは膨大な叢書で、使いたいのはその内のごく僅かだけというようなものだけを図書館に期待しているわけです。それからこの頃本代が高騰しまして記念論文集なども２万円、３万円とします。実際に使いたい論文はその内の一つか二つなものですから、こういうものは図書館で買っておいてくれと。雑誌も同じことです。総じて言えば大きな本のごく１部を使いたい。我々は従来、研究している時は大きなもののごくごく１部だけ使ってそれで飯を食っているという、紙魚みたいなものだと思いますが、我々の図書館に対する要求というのは、そういうものに過ぎません。

しかし、大学の図書館というものは学生サービスという一環があり、学生に対してはありとあらゆる本が必要になってきます。入門書から専門書までです。更に仏教というものが仏教だけにとどまらない広がりをもっています。昔から五明（ゴミョウ）といって５つの関連学問がある、医学、音楽、建築、論理学、それに宗旨を明らかにする哲学など何でも入ってくるわけです。そういう学問が全部あわさって仏教を支えているのだという立場からすると、仏教学に必要な本はありとあらゆる百科叢書であるということになり、仏教系大学の図書館の使命は大変重いものだということになります。

仏教系の大学が日本にはたくさんありますが、その特色をひと言で言えば、これは当たり前のことなのですが、仏教書がたくさんある、これに尽きるわけです。ところが、それを世界的に視野を広げて見てみると世界中に仏教学の学者、或いは信者、実践家と言われる人達はたくさんおり、特に学者は一匹狼のような人があちらこちらにいて頑張っていますが、一つの大学でこれだけの仏教書をそれぞれに備えている国というのはありません。実は大変なものを我々は持っているのだということを、常々考えている訳です。

正に小判の山であり、１冊古本屋に売れば半年位食えるのではないかという本もあるのです。先日もうちの大学の図書館印の入った本が古本屋に出まして、大慌てで買い戻したのですが、商売というものはあこぎなものでうちに弱みがある場合は高く言うのです。よ

その大学の図書館の蔵印も見つけました。これはそこに高く売りに行こうと思っていますが。

そういうことで大変な宝の山に囲まれている訳ですが、今申しましたように、図書館が素晴らしい蔵書を持っているのは日本だけです。なぜかというと、日本では、仏教の宗門というものが大きな力をもって仏教系大学を支えてくれているからです。ところが、そこで問題が起こりまして、大学と宗門というのは本来犬猿の仲のような感じでして、宗門というのは自らの宗派が１番良いと思ってやっているわけですから、そういう答えを出せと言ってきます。ところが学問というのは、人の言うことを信じないところから出発しますから、何でもかんでも「それは正しいか」、「あなたたちの言っていることは間違いではないか」、ということになりますので、ここで大学と宗門の立場は異なってしまうわけで、その正に矛盾の撞着するところが仏教系大学ということです。我々も常々、宗門的な要請と学問的正確性というものの間をさまよっているわけです。

宗門と大蔵経

個別花園大学について申しますと、ここは臨済禅の宗門大学であり、臨済禅というのはご承知のように「不立文字」（ふりゅうもんじ）、文字を立てない、というのを宗旨としています。文字はいらないということです。実はこの文字という言葉はお経のことでして、中国の古い翻訳のお経はみな経のことを「文字」と訳していますし、チベット語でもお経のことは「文字」というわけですが、その文字に依存しない、つまり経典に依存しないというのが禅宗の立場です。その際、今回特に大蔵経の問題が大きく取り上げられていますが、こういう文字をバカにしている宗門にとって、大蔵経、或いは典籍というものはどういう位置付けがなされているのか。

そもそも禅宗にとって仏典、つまり三蔵ですが、禅に三蔵はあり得るのか、というような問題が当然出てくるわけです。中国あたりの学者は仮説として「禅蔵」、禅の蔵というようなものを立てていて、中国のテキストに『禅源諸詮集』（ぜんげんしょせんしゅう）というのがあったそうです。今はそれの総序にあたる『禅源諸詮集都序』（ぜんげんしょせんしゅうとじょ）というのが残っていますが、序文だけが残っていて本体は不明です。ですから「禅蔵」というものを作ろうとして序文を書いたのだという説は肯うにしても、その「禅蔵」が実際に成立したかどうかは全く分からないというところで、実態は不明のままに置かれているわけです。

そしてまた、どの宗派においても、例えば禅宗がお経そのものをバカにするように、宗門それぞれの立場のテキストというのは比較的少ないわけで、それは大蔵経のごくごく１部を構成するに過ぎません。それには何となく釈然としない思いが残るわけですが、もともとお経などを読んでいますと、こちらに書いてあることとこちらに書いてあることとは矛盾を起こします。そんなことは当たり前で、言葉というものは必ず１つの論理によってくくられるのではなく、書き手や読み手の論理が違えば結論も違ってくるわけで、その上、違っている結論が実は真実・真理の立場からは同じことである、というような言葉の不思議の世界はいつでもあります。ですから文字面だけ見れば矛盾撞着はそこら中にあるわけです。学者というのはそういうものが嫌いですから、こちらが良ければこちらはダメ、というように単純に結論を出したがります。そうすることによってすっきりしたものにするのです。

それとは少し意味が異なりますが、教相判釈（きょうそうはんじゃく）というものも、そういう動機から、大蔵経をいったんバラバラに解体して、その中から自分達にとって本当に大事なものを中心に再構成する意図を持っているわけですが、そういう教学整理を経て、更に一行三昧（いちぎょうざんまい）、更に選択思想（せんぢゃくしそう）とひたすら簡便化の方向をたどります。

昔の宗門の祖師達もいろいろ勉強して、大蔵経を何度もひっくり返して、その挙句にごくごく簡単な真理に行きついていくわけです。大体真理というものはいつでも簡単だと。フラクタルなんてややこしいものが出てきた

ので事柄がこんがらがるのですが、古典的な立場で言えば真理は簡単で美しい、というところに祖師達は気づいて、その1番大事なものだけをピックアップして、お経や論書の選択、或いは放棄が行われていったわけです。

禅宗教理整備の時代

禅は全部お経を捨てていくのですが、それにもプロセスがあります。大体禅宗史というのは、大雑把に言うと、まず教理を整理していく時代、つまりお経や様々な論書、先人の残した遺産を使って教理をまとめ上げていく、そういう時代があります。そこで成立するのが、以下に掲げるような初期の禅宗のテキストです。

『小室六門』（しょうしつろくもん）
『二入四行論』（ににゅうしぎょうろん）
『伝法宝紀』（でんぽうぼうき）
『楞伽師資記』（りょうがしじき）
『六祖壇経』（ろくそだんぎょう）
『神会語録』（じんねごろく）

これらは不思議なことに、ほとんどが敦煌本で、中国の本土では見つからないものが多い。ということは、この初期の、教理整理時代の禅は、中国の禅の伝統ではもう捨てられているのです。要らない、これもゴミだということで、敦煌にしか残っていない。中国には長い歴史と文化を持つ国ですが、戦争や王朝の交代などのさまざまな外的条件はあるにしても、存外古いものをあまり大事にしない一面があります。実用性重視という現実的な民族性にも関係するのかも知れませんが、ともかく古いものは本土にはあまり残っていない。

僻地である敦煌にたまたま残されている文献というのは、敦煌の特殊な仏教事情を反映していると思いがちですが、必ずしもそうではない。僻地にまで伝わったということは、中央にもあったのだということを、まず考えておかないといけない。敦煌仏教だけが大変特殊なものだというのは、思い込みが過ぎるわけです。西域との玄関口ですから、情報が速かったということはありますが、それ以上に情報は中央に伝わり、中央から逆輸入されているのが敦煌に残った仏教文献の主流であろうと考えているのです。

そこには大体5、6百年頃、中国仏教の始まりから千年頃までの文献が積み重ねられていて、本土ではどんどん変わっていってなくなってしまったもの、それがこちらに残っていたということで、我々、特に禅宗にとっては大事な資料がたくさんあるのですが、それは禅宗史という学問にとって大事なものだということで、禅宗やそれを支える人々は、こんなものはゴミだということにしてしまったわけです。

禅宗独立時代

その後教理の整備時代が終わり、独立時代に入っていきます。それはいわば、『馬祖語録』などに代表される「語録」の時代で、祖師の言葉をそのまま受け止めてそのまま記録していく。たった2人だけで密かに喋った祖師と弟子の問答が記録されているというのも考えてみれば不思議なことなのですが、相当にフィクションが入っているわけです。宗旨に合わせて物語を語らせる、つまり舞台における一種の演技、シテとワキと言うか主人公と道化のような役割をさせて語録を成り立たせているわけです。そういう個々の祖師達の語録を集めて『四家語録』とか、『五家語禄』というものを集成して、それは『景徳伝灯録』、さらに『五灯会元』（ごとうえげん）などというものに集成されていくわけです。

一方、こういう全く独自の動きをする宗派でしたから、独特の規則が要る。特に戒律に目を向けますと、インドの生活習慣を反映した「律」は中国で守れるわけがない。袈裟1枚で1年中過ごせば皆凍えて死んでしまいます。できないことがいろいろある、で、どんどん変えていく。今の日本の憲法のようにどんどん変えていくわけですが、そういうことに我慢できなくなって、これは形式的に受け取るもの、そして実際の生活は別の規則で行いましょうというようにしてできたのが、『百丈古規』などの禅宗の清規（しんぎ）です。こういう清規系のテキストというものも禅文献の特徴を担っているわけです。

それから、禅僧といっても学者系の禅僧といった人がたくさん出るのですが、そういう人が書いたもの、先程も言った『禅源諸詮集都序』のような様々な論考を加えたものがあり、これらを並べてみると、従来の経典というのは語録に置き換えられる。経典もよくよく見ると、あれは仏陀の語録であり、同じものだと。特に禅宗の場合には仏陀と祖師は同じだ、如来と祖師は同じだという考え方をしますから、経典の位置に語録がとって変わるわけです。

律典の位置には今言ったように清規がとって替わる、そして論典の位置には注釈がとって替わる。ということで、並べてみると、禅にも三蔵として独特のものがあるのだということに気がつきます。このように見ていくならば、どの宗派にもそれぞれ独自の、宗旨にのっとった三蔵があるのだなということが分かってきます。

禅籍整理の時代

この独立時代を経て、ちょうど唐末から宋に移る時代、これはどんな時代かというと、混乱の中で発展した禅が、やがて宋の時代に国家に取りこまれ停滞していく時代です。逆に、印刷技術というものがこの頃から発明され発展していくわけで、膨大な典籍が生み出されていきます。ほとんど読まれていないのではないかと思うようなテキストがごろごろ出版されていて、我々も大変苦労しているのですが、宋の時代にこういう集成と整理、そして洗練といった作業が延々と行われ、大蔵経が次々に開版されていく。

大事なことは、文字資料にして固定すると、不思議なもので、そこから錯誤が生まれてくるということです。文字というものを我々は信用して、文字に従って勉強したり研究したりしていますが、文字は必ず間違える。そして偉い学者が校定するとまた間違える。経典は、どんどん間違いが増幅されていく。さらにきわどいことを言えば、間違えた経典でもって悟ってしまう、真理に到達してしまうということが現実にあるわけです。そうなると言葉で語られた真理は何なのだという、非常にややこしい問題もまた生まれてくるわけです。

このように膨大なテキストが生み出され、これは各宗派に共通していると思われるのですが、特に禅籍の場合には膨大なものがある。というのは、宋の時代は禅が大変大きな力を占めていたからなのですが、とにかく文献は沢山あり、とても一人で一生のうちに読み切れない。学生時代に、よく我々は冗談で、「あの本があればいいのに」と言う代わりに、「あんな本なければいいのに」というような話をしていました。読まなければ仕方がないけれども、あれを読んだらまた次のやつを読まなければいけない、「図書館なんてなくなってしまえ」、なんて昔はよく言っていたものです。

それは冗談として、そういう膨大なテキストを整理したものが『禅籍目録』、これは駒澤大学が頑張ってお作りになったものです。それから臨済の側には柳田聖山先生の『禅籍解題』というようなものがあり、大体の典籍のアウトラインを知ることができます。ただし、禅だから漢文だけでいいだろうというわけにはいかなくて、その教えの根幹にはやはり仏陀の仏教が入っています。ですから当然、サンスクリット語、チベット語、パーリ語さらに西夏文字、最近ではウィグル文字などの、中央アジアの文献、言語というものも必要になってきますから、個別の宗旨を掲げる大学としても、全部揃えてしまうということになっているわけです。

原典回帰

先程も申しましたが、そういうテキストは文字資料です。活字に置き直します。その時に校訂という作業がある。校訂する時に、一生懸命するのですが、どうしても主観が入る。そして読めない場合、無理に読んでしまう。こういうことがありまして必ず過ちが入ります。だからテキストは時代が経つにつれ、正確を期しつつ不正確な方向へ陥っていく。つまり、研究が進めば進むほど逆に問題が出てくる、錯誤が増えるという、一種のパラドックスの世界に、文字の学問、特に近代科学というのは入って行っているわけです。そういう点から、図書館も力を入れてくれている訳

ですが、我々は原典回帰という方向を打ち出しています。

これは何かと言いますと、本日お配りしたような古い資料、例えば大蔵経でも、宋版が一番古いですから、頼りにするのは宋版というふうに、古いもの古いものに下がっていく。さらに手書きの古いものがあれば、宋版と比べてどうなるのか。漢文の文献はサンスクリットと比べてどうなるのか。サンスクリットが古い古いと思ったらとんでもないことで、実はチベットで十数世紀に発見されたものが多く、これは還元翻訳されたものがほとんどですから、今の仏教学者がそういうサンスクリット文献をサンスクリットだからという理由で重視するのはちゃんちゃらおかしい訳です。最近、またそれにやっかいな問題、ノルウェーの財閥が買い取ったこれはとんでもなく貴重な文字資料群があり、これは特に佛教大学の松田先生が大変お詳しいのですが、そういう問題があり、原典研究というのも進めば進むほど様々な課題が出てくる。

というわけで皆が志向しているのは原典です。「原典」は「原点」でもあるわけですが、そういうところに戻って行って、そこに直接入っていかなければならない。

デジタル化

印刷本には明らかに限界がある、ということで我々の大学は今、積極的にデジタル化ということに取り組んでいます。国を挙げて、そして世界中でこのデジタル化、これは大変有効な材料なのですが、それの初期から私も関わってはいたのですが、デジタル化しながら常々忸怩たる思いをしていたのは、これは間違い字も生じるぞと。だからデジタルテキストを見れば必ず本物を見なければいけないのだというような思い、或いは怖れを持っていました。

この頃は比較的正確な、そして壊れにくいテキストも出ていますから、その点は日進月歩、大変あり難いのですが。そういうデジタルテキストの形成というのは必趨の勢いで、これからも目もくらむような展開が期待されています。それと同時に大事なことは、その時に画像資料を作って、美術的資料でも画像ですが、文字資料もまた画像で持たないといけない。ということで、古いテキストをそのまま画像で入れて、デジタル化したテキストとリンクさせていくようなことがこれから大事なことになっていくのだろうと思います。

で、そういう方面に詳しい2人の方が後に控えていまして、私は前座を努めたわけです。デジタル化の問題、画像の問題に入りましたので、「お後がよろしいようで」ということで、非常に荒っぽいお話をさせて頂きましたが、これで終わらせていただきます。

（おきもと　かつみ）